

申命記 10章12節～11章1節 マルコによる福音書 9章42～50節

私たちの信仰とは何か、そんなことを考えさせられた数日間でありました。それは、3週間前に味わったあの後味の悪さを再び味わうことになったからであり、また、後悔と慚愧の念をもって死ぬことになったオウムの彼らと私とが、ほぼ同時代を生きる者でもあったからです。特に、彼らと私とでは、その求めたところは違っても、一つの道を歩み出したというところでは同じです。それゆえ、私の場合、出会ったところが、たまたま良かったということにもなるのでしょうが、けれども、その最初の一步を踏み出す以前においては、彼らと私とでは、多くのところで重なり合うものでもありました。それだけにまた、単純に彼らが悪かったというところで片付けることが、どうしても、私にはできないのです。そして、それは、私と彼らが、ということだけではないようにも思います。

生き辛さを感じる人々の多くが思うことは、そこで感じるであろう気持ちの悪さを取り除くことです。刑に服した彼らも、その点においては同じでした。けれども、彼らと私たちとでは明らかな違いがあります。私たちも、また世の多くの人々も、自分はそうあってはならないと言うところを彼らのように譲ることはなかったからです。それゆえ、彼らのやったことは、絶対に許されることではなく、自らのその命をもってしてもなお、償いきれないものが残されたままなのは明らかです。ただ、それがどんなに醜く忌まわしいものであっても、譲れないとの思いは、彼らにもあったわけで、その用い方を誤ったその彼らと、あるところまで同じように歩んできたのが、私たちでもあるのです。そこで、そんな彼らと私たちとを遠いというところからではなく、近いというところからもう一度考えるなら、彼らと私たちとの違いとは、一体何なのでしょう。

いかなる信仰が与えられようとも、世の人々も私たちも、同じように生き辛さを感じながら、毎日を過ごしているのは間違いありません。けれども、刑に服す

ことになった彼らは違いました。彼らには、修行と称するものを通し、達成感、充実感がありました。そして、あの忌まわしい、醜い出来事のすべてが、その延長線上に置かれているものでもありました。ただ、彼らが求め、実際に手にしたと思っていたものがまやかしかつたことは、すでに言われている通りのところでもあります。けれども、生きづらさを抱えたまま生きる私たちも、彼らと同じように、自らが納得の行く答えを探し求めないわけではありません。けれども、多くの場合、そうした試みは、そのほとんどが失敗に終わるものです。そこで、真剣に、今すぐに、この生きづらさを解消したいと思う人は、期待した結果が得られないときには、次の何かに期待し、行動を起こすことにもなるのでしょう。また、それほどでもない人は、年に一度、初詣に行くくらいのところで、ことを納めようとするのでしょう。けれども、私たちはというと、次に行くこともしませんが、自分の都合に合ったものを探し歩くこともありません。ここから一步も動くことはなく、こうして与えられた信仰にじっと留まり続けている、それが私たちでもあるのです。ですから、そうした人々と私たちとの違いは、この同じところ、つまり、それが、主の御心、主が示された一つの道ということでもありますが、この同じところに立ち、主と共に歩み続けているのが、主の教会に生きる私たちキリスト者だということです。ただ、動かないという点では、オウムの彼らも同じでした。

そんな中で、私たちは、揺れ動くし、行き詰まりを感じるし、どうしても、彼らは、違いました。そうしたものを克服せねば、何とかせねばと考え、そして、行き着いた先が、二十年前のあの忌まわしい出来事でもあったのです。けれども、そうした揺れ動く思いを抱えつつも、なお変わらずに同じところに立ち、御心に委ね、これだけはできないとの思いを抱えたまま、2000年のこの方変わらずに歩み続けてきたのが、私たち



近で、より具体的なものであったからです。それだけにまた、地獄への恐怖心は強く、避けるべきもの、忌むべきものとの考えを強くしていったわけです。特に、戒め、教え、定めなど、律法を厳格に守るよう命じられていたユダヤの人々にとっては、なおのことでした。

律法を守ることの目的の一つとして、モーセは幸いを得ることだと語ります。それゆえ、これをしていけば、これさえすればとの思いを強くしていった人々にとって、そこから外れることは、幸いが遠ざかることでもあったからです。けれども、それゆえにまた、人々のそうした思いの強さが、神様の愛の現れである律法とは反対の方向に向かわせ、その結果、主イエスが生きたその時代全体を覆うこととなったのです。それは、ここで主イエスが弟子たちをたしなめているように、弟子たちのその姿からも分かります。それは、横道に逸れてはいけない、道を踏み外してはいけないといった、人々の幸せを求めるその思いの強さゆえの窮屈さです。

今日の旧約聖書においても語られているように、幸いを得るためには、主イエスが指摘する小さき者への配慮のなさは、当然改めなければなりません。それは、神の国には、この小さき者も含め、すべての者が神様によって招かれているからです。ところが、真面目な彼らが、そのことゆえに、人に躓きを与えてしまっている。時代を包んでいたものは、皮肉とも言えるこの現実でもありましたが、私たちもまた、弟子たちと同じこの現実立ち、同じようにこの御言葉を聞いているわけです。それは、何とも言えない話ではありますが、ただ、その私たちに、主イエスは、さらに追い打ちをかけるように個々でのことを語るのです。ですから、それを聞かされている私たちからすると、そこで、こう思うに違いありません。主イエスも、同じように、小さき私たちに躓かせているじゃないかと。それゆえ、不慣れな人にとっては、本来いいものであるはずの信仰は、余計に怖いもの、忌まわしいものと感じさせもするでしょう。

ただ、問題は、アレルギー反応を示す人たちよりも、主イエスの弟子である私たちの方です。主イエスのこのお言葉を主イエスのすぐ近くで聞いている私たちも、言葉に出さずとも、主イエスのその

言葉遣いの中に暗いものを感じてしまっているからです。それゆえ、有無を言わせない主イエスのやり方に、不遜であることを弁えつつも、私たちは、苛立ちを募らせることになるのです。しかし、私たちがそう思うであろうことは、主イエスもご存じでありました。では、主イエスが私たちをしてそう思わせるのは、どうしてなのでしょう。それは、主イエスもまた、そうした暗い時代状況の中を私たちと共に歩んでおられるからです。まただからこそ、この暗さに一石を投じようとしたのが主イエスでもありましたが、それは、暗さに対しての明るさ、明るさに対しての暗さといった、どちらが上でどちらが下かといった、そういう比較の問題として、何かを語ろうとしているからではありません。主イエスが語る場所は、比較の問題ではなく、神の現実に生きるそのまま姿であり、暗いこの世の現実、その時代状況といったものが、神様の明るい現実の支配にあることを率直にただ伝えようとされているだけなのです。

私たちが主イエスと共に生きるこの世の現実、私たちが見れば、ただ暗いだけのものであるのかもしれませんが、けれども、主イエスが語る神様の現実の明るさは、それとはまったく繋がりのない別物でもあるのです。暗いものは、ただただ暗く、それゆえ、この暗さの中でしか物事を見ることのできない私たちは、私たちと同じ地平に立つ主イエスの言葉にすら暗さを感じてしまうのです。それは、この暗さの中で神様の働きを感じることができないからであり、また、働きがあることを知りつつも、神様にすべてを任せきることができず、自分の思い通りにすべてを作り上げようとするからです。まただから、自分で何とかせねば、解決しなければと思う多くの人たちは、その結果、あれとこれとを比べ、これはダメ、これはいいとの判断を下し、ダメだと思ふもの、いらぬと思ふものをポイポイとゴミ箱に捨てるような真似をしてしまうのです。そして、そのように都合なもの、都合のいいものを何でも捨て去ることのできる場所が、地獄というところであり、つまり、地獄とは、そういう意味で、恐ろしいだけでなく、私たち人間にとって都合のいいものでもあるのです。だから、その使い勝手の良さゆえに、時に人に利用され、人を欺き、人をこの地獄へと追

いやり、また、自分自身をも貶め、破滅を迎えることにもなるのです。

それゆえ、地獄とは、私たちの置かれたこの世の暗い現実の裏返しのものだとも言えるのでしょ。けれども、この暗さの中に独り子である主イエスをお遣わしになったのが私たちの神様であり、それゆえ、神の支配が及ばないと思ひ込んでいたこの世界は、神様のご支配の中に置かれていることが明らかにされたわけです。ですから、このことを経験として知っているのが私たち信仰者でもあるのですが、ただ、私たちが、主イエスの言葉にすら暗いものを感じてしまうように、この暗さは、まだこの世界から完全に取除かれたわけではありません。そのため、時にこの経験が生かされず、私たちもまた、その気持ちを右に左に大きく揺れ動かすことになるのです。けれども、だからこそまた、そこで、私たちは、忘れてはならないのです。それは、神様の明るい現実を届けてくださった主イエスが私たちと共にいます以上、天国の扉は、私たちの前には閉ざされてはおらず、開かれているということです。なぜなら、そこに何としても導こうとされているのが、私たちの主イエス・キリストでもあるからです。

従って、主イエスのここでの乱暴とも思える言い回しは、その覚悟の現れとも言えるのでしょ。ただ、それ以上に、私たちが見つけるべきことは、主イエスが、ここでそうまで仰るように、事実として、暗いものではなく明るい神様との交わりの中に置かれているのが、この世界に生きる私たちでもあるということです。そして、それは、聖書における神様の第一声が、「光あれ」というこの一言であったように、この神様の明るさの中に造られ、置かれているがゆえのことであり、そのことを、この世の暗い現実私たちと同じように身を置きながらはつきりと語ってくれているのが、私たちの主イエス・キリストというお方なのです。そして、それが、今日の主イエスの最後の御言葉、つまりは、「そして、互いに平和に過ごしなさい」というこのことですが、この言葉の中に現されているように思います。

主イエスが語る「平和」とはつまり、神様の創造の秩序に覆われた状態のことであり、そのことを互いに味わうことが許されているのが、主イエスとこの世界

に生きる私たちでもあるということです。だから、暗さばかりに目を奪われる私たちは、その暗さを感じつつも、この世界は明るい信じることができるのです。ですから、今日のこの御言葉は、この神様の明るさ、私たちが思ひ込み、感じる暗さではなく、主イエスと共にある神様の明るさの中で聞いていくなれば、主イエスのお言葉は、また違った意味合いで私たちの心に響くことにもなるのです。

神の創造の秩序の許に置かれているこの世界にあって、主イエスは、互いに平和に過ごすために、自分自身の内に塩を持ちなさいと語ります。塩は、腐敗を防ぐだけでなく、汚れから私たちを遠ざけるものでもあります。ここでは、その塩が、地獄と言われているものとの繋がりの中で語られているのです。このことはつまり、極論すれば、私たちが自分自身の内側に抱え込むべきものとは、地獄ということです。それゆえに、私たち信仰者は、地獄を正面から見つめることができるし、また、そこに安心して留まることができるのです。そして、主イエスが、このような逆説的な言い回しをしているのは、こうして信仰が与えられているとはいえ、私たちが地獄を避けようとするあまり、この地獄を自分の都合のいいように用いようとするからです。天国の対極に地獄を置くのはそのためであり、けれども、主イエスは、神の国の対極に置くことはありません。神の国は、人が考える神のご支配の及ばないところではなく、神のご支配の許に置かれ、たとえ私たちが、この地獄と称するものの中に置かれようとも、主イエスを信じる私たちには、信じるがゆえに、開かれた天の御国の扉を通し、神様の御心が届けられているのです。なぜなら、この地獄と称するものの中にも、私たちは、主イエスと出会い、その声を聞き、そして、その先に向かって歩み続けることができるからです。従って、暗い現実の中にあつて、この明るさの中に置かれているのが私たちであり、そして、この明るさに導かれ、その命は生まれ、耕され、そして、その先に備えられているものが神の国だということです。それゆえ、この塩を自らの内にもう一度確かめ、新たな一歩を踏み出す私たちでありたいと思います。祈り

祈り